

熊のぬいぐるみ

網嶋 美月

あなたは何か不可解な出来事にまきこまれたりしたことはありませんか。デタラメに言った予言が見事に当たったなど、ふと言ってしまったことが、現実でおきるところかわいいですね。今日は、私が実際に経験したとある物語をお聞きください。

当時小五だった私は、友達もいないただの平凡な小学生だった。周りの子は私をみじめな目で見て、からかう。それが私の日常だった。

ある日、私はクラスのマドンナの存在陽奈ちゃんに、私に用事があるから、裏庭の草とりをして、たのんできた。本心「めんどうだな」と思ったが、笑顔で、

「分かった。」
と言った。

草むしりが終わって午後五時を回ったところ、私は陽奈ちゃんが友達と遊んでいる所が見えた。その光景を見て、だんだんと腹が立ってきた。いままでおさえてきた本心がいつきに爆発しそうだったが家までその気持ちをこらえた。げんかんで母がやさしく、

「おかえり。」

と言っても、そっぽを向いてそのまま部屋までいった。私は小四のころに買ってもらった大きな熊のぬいぐるみにむかって、

「陽奈ちゃんが近いうちにいなくなればなあ。」
と気づかないうちに、本音をぶつけていた。

次の日、いつも通り学校に着くと、クラスが何やらさわがしい。ふと陽奈ちゃんの席を見たら、すがたがない。なにかあったのは確かなのだが、けっきょく分からなかった。

後で先生の話を知ると、話の中にいっしゅん耳をうたがった。

「今日の六時ごろ、ジョギングをしていた人が、川に流されている陽奈さんを発見したそうさ。すぐに運ばれたが、意識はないそうさ。」

と、暗い表情で言った。それからは熊はおし入れに入れた。だつてつげられた後、熊を見るとかすかに笑っていたような気がしたから。